

〈第八話〉

美女泣かせのせせらぎ

むかし。

漆千貫か、米千貫か、弓千張か、銭千貫かを持っている程のふくしい人を長者様と呼んでいた。

いつの頃か野上の里の下手に忠兵衛という長者様がすんでいました。忠兵衛長者の独り娘の小夜姫は、生まれおちてからなに一つの不自由もなく、多くの侍女たちにかしずかれて、蝶よ花よと楽しい歳月のうちに育ちましたが、やがて齢も二八（一六才）になりましたので、毛戸の里の糠塚長者の世継のもとに嫁ぎました。

山の長者屋敷の庭に咲きほこった桜花も散り、山吹の花がさき乱れ藤の花が紫にたれる頃、野山は青葉にむせて、小夜姫が嫁いだから初めての節句の日がやって来ました。

「ゆっくりと実家にとまっておいで。」優しい姑の言葉におくられた小夜姫は、付き従う小女に、里へのお土産にと、たくさんのお餅やワラビを背負わせて、阿武隈の山路つたいに葉芹川沿いの道をいそぎました。